

日高丸	五、四八六	一九・一・二〇
日張丸	六、五五〇	一八・四・一六
備前丸	四、六〇四	一九・五・二四
濱江丸	五、四一八	一八・六・二二
ふろりだ丸	五、八五四	一八・四・六
平洋丸	九、八一五	一八・一・二〇
北江丸	五、三八四	一八・一・一九
北泰丸	五、二二〇	一九・三・二七
北洋丸	四、二一六	一九・三・一七
ほるどう丸	六、五六六	一七・二・一
萬寿丸	五、八七五	一八・一・二九
満泰丸	五、八六三	一九・七・二六
美崎丸	四、四二二	一九・一・二四
美作丸	四、六六七	一九・四・九
美保丸	四、六六七	二〇・四・三〇
美山丸	四、六六七	一九・五・一四
山鬼山丸	四、七七六	一九・二・一七
山国丸	六、九二一	一九・一・一四
山幸丸	五、九四八	二〇・一・一六

山珠丸	四、六四二	一九・八・九
龍江丸	五、六二六	一九・八・四
麗洋丸	五、四四六	一九・二・一七
和山丸	四、八五一	一九・四・二六

第二十三特別根拠地司令部

昭和十七年三月十日、佐世保鎮守府聯合特別陸戦隊司令部を改編し、以来南西方面戦地戦務であり第一線で戦務甲であった。

一軍医の戦地の足跡

鳥取県 福島敏夫

昭和十六年七月、岡山大学稲田内科教室に勤務中再度召集令状がきた。召集部隊は、昭和十六年七月十六日、動員下令された、第百兵站病院（鷲第三九五一部隊）である。その編成管理は、姫路編成の第五十四師団が担当し、同年八月一日に関東軍第十五兵站衛生隊

の隷下に編入する命令が出された。

第百兵站病院は部隊長を除いて皆召集の者ばかりで、続々と姫路に集合、八月三日編成は完了した。部隊長・陸軍軍医少佐・岡崎徳行、以下部隊員は将校、下士官兵、三五九名と部隊長用の馬一頭である。

昭和十六年八月二十日姫路を出発、防諜のため見送りもなく、列車の窓も全部閉ざされていた。

同月二十一日宇品港を出航。台風のため朝鮮海峡で船は五島列島まで流され、釜山到着は一日遅れた。待機していた軍用列車に搭乗、二十七日夜半鮮満国境（鴨緑江渡河）を通過、二十八日満州国ハルビンに到着し、第十五兵站衛生隊に所属した。そしてハルビン第一陸軍病院長の指揮下に入った。

八月二十九日より九月二十二日の間、我々はハルビン陸軍病院の補助業務に従事し、孫家分院を開設して医療業務に従事した。ハルビンでは初めて異国情緒を味わった。広々とした荒野の風景、赤い夕陽も忘れ得ぬ思い出である。

昭和十六年九月二十三日、「急遽、ハルビンを出発

して大連へ集結すべし」の命令によりハルビンをたつて、三十日大連港に集結、乗船出航した。大連への車中から林檎畑が続く、赤い実がたわわに実っている光景に驚いた。台湾行きは船中では食欲は全くなく、満州のリンゴを嗜って過ごした。

十月四日、我々は基隆港に到着、翌五日上陸、台湾軍の指揮下に入った。台北市郊外の板橋街に至り、同地の板橋国民学校を宿舍として、十一月三十日まで駐留待機をしていた。上陸して数日後、私は台北の軍司令部に連絡に行ったが、岩宮葉劑中佐と久しぶりの懐かしい面会ができた。岩宮中佐は、私が歩兵第六十三連隊付きの軍医中尉で、松江陸軍病院勤務中の当時の岩宮葉劑大尉とよく散歩をした間柄であった。中佐に「どこへ行きますか」と小声で尋ねたら鉛筆で「フィリピン」と書かれ、すぐに消された。

岩宮中佐は、我々兵站病院の衛生材料はすべて準備し、台湾軍の衛生材料の元締責任者であった。私は待機中、部隊の教育主任を命ぜられていたので、帰路、書店よりフィリピンに関する書籍を数冊買い求めた。

台湾待機中、当時の満州虎林陸軍病院長・羽田野中佐から、ちょうど私の医学博士の学位論文通過を新聞で見た、とお祝いの便りをいただいた。羽田野中佐は私が松江の歩兵第六十三連隊に短期軍医勤務中の高級医官であり、支那事変の時には私たちの野戦病院長でもあり、随分お世話になった方でもあった。私たち軍医は、台北帝国大学医学部教授方の南方の衛生状況の講義を聞いて勉強していた。

我々の部隊は昭和十六年十二月二日には基隆港から乗船していたが、別の船に我々の部隊を指揮する兵站衛生隊本部があったので、私は連絡に行かされた。その部隊長の副官が望月軍医大尉であったので、奇遇に大変驚いた。彼は大学一年後輩で、同じ下宿で過ごしたこともある仲である。彼は部隊長と同室で、ルソン島のリンガエン湾の上陸地点を書いた機密のガリパン刷りを見せてくれた。しばらくして部隊長が帰って来て、私たち二人はひどく叱られた。

十二月五日、台湾軍司令部に西本中尉が命令受領に行ったとき、比島の通貨「ペソ」やフィリピンの地図

をもらって帰り、フィリピン行きを知った云々。十二月八日、船上で開戦を知り、我々病院部隊は十二月十七日基隆港を出港、台湾沖で船団編制、護衛されて南進した。

ルソン島リンガエン湾に着いたとき、波高く海は荒れていた。同船していた京都の歩兵部隊の将校は早朝四時ごろ食事を共にしたが、この方たちは、敵前上陸時、正午ごろまでに多数の戦死者を出した由。私たち兵站病院は二隻に分乗したが、第二班部石原部隊の隣船「巴洋丸」は十二月二十二日七時半、敵の魚雷にやられ、第四十八師団第四野戦病院の第二班部の人員は助かったが、衛生材料は全部沈んだ。そのために、私たち病院は数班に分かれ野戦病院の役割をした。私たちはダモルテスに十二月二十六日に上陸し、同日ロザリオに第一班部主力で病院を開設した。

次に私たち第一班部主力はカバナツアン市民病院を接收して病院開設、第二班部はタルラックに開設中であつたが、一部を南サンフェルナンドに開設し、バタン半島攻略戦の傷病者の収容に当たった。私たちの

病院は人員が多くて、小回りがきかぬので半分に分けたり、四分にしたり動きやすい編成をした。

昭和十七年二月五日、第百兵站病院は軍令によりタルラックに集結待機、更に二月七日南方派遣軍命令により『「ダモルテス」に至り乗船すべし』の命令を受け、部隊はダモルテスに推進、第十六軍司令官（今村中将）の隷下に属し、第四十八師団土橋兵団の指揮下に入り、ジャワ侵攻作戦に参加した。

各地に点在していた第百兵站部隊は大急ぎでダモルテスに集まり、乗船前夜は浜辺の椰子の木陰で仮眠し、早朝、空っぽの「あらびあ丸」（一万トン豪華船）に乗船した。我々が乗り終わったところには他の船は既に出港していた。私たちの船団は四十八隻（二二万トン）の大船団を編制し、ジャワ行きの中途ホロ島付近に集結していた。ボルネオとセレベス間の海峡は夜間照明弾が明るくぶらさがっていた。

ボルネオのバリクパパンを過ぎたころ、南下しているとはかり思っていたのに、船団は北上していた。これはジャワ沖海戦の真っ最中であった。そして大船団

は幼稚園の子供が手をつないでいるようなものだと言われた。

二月二十七日、ジャワ沖海戦は夜四回あった由である。翌々日我々の船から見ているのを見かけた。後がボートで漂流し助けを求めているのを見かけた。後で、日本海軍が大勢救助したとのことである。我々がジャワ島クラガン海岸に上陸する前夜、敵機は執拗に我々の船を撃ちまくっていた。

昭和十七年三月三日、ジャワ島クラガンに上陸開始した。クラガンでは予め私を長とする四分の一部隊で病院開設が決めたので、上陸と同時に倉庫などの建物を利用してクラガン患者収容所を開設した。何分にも暑いので患者は裸で外出したりする有様である。そこへ、ひょっこり土橋兵団の参謀がやってきて、患者の裸姿を見て、ちょうどそこに居合わせた恰幅のよい美髭の持主長谷川軍医が院長と間違えられ、私の代わりに叱られた由である。

兵站の主力は既にスラバヤに入り、真新しいスラバヤ医大の付属病院を接收して病院を開設していた。

クラガンではしばらく患者を収容していたが、ここでは救助された英水兵（約百名余）や、ボルネオのタラカン司令官などを収容して、食事の世話もしていたようであるが、あるとき、お粥にタクアンを運ぶのを見て驚いた。やがてクラガンを引き揚げてスラバヤ行きの命令が出たので福島隊は全員無事スラバヤの本隊に合流した。

スラバヤに到着すると、岡崎部隊長ら主力はバタビヤに行くことになった。十日間の余裕があるから病院業務はしないで移動準備をするようにと言われた。

陸路鉄道は破壊されているので、海路バタビヤに行くことになった。岡崎部隊長は出発直前発病され、第二班部石原隊（スラバヤ病院）に入院された。

主力第一班部は福島が引率することになり、スラバヤ港から海軍に護衛されてバタビヤに向かい、スラバヤでは土橋兵団の参謀など大勢見送ってくれた。

昭和十七年四月七日、バタビヤの港タンジョンブリオークに上陸した。そして直ちに旧オランダの陸軍病院を使用して第百兵站病院を開設した。そのとき、軍

医部の部員からキニーネの倉庫の鍵と病院図書室の鍵を受け取った。

福島が先任であったのでしばらく院長代理を勤めることになった。軍司令部の膝元で、毎日参謀や司政長官など見舞いや視察に来られるので、その案内、応接に忙しく休む暇もないくらい。

（この第百兵站病院の使用した旧オランダ陸軍病院は、現在改築されてインドネシアの陸軍病院として使われ、一般民間人患者も収容されている）

ジャカルタ第百兵站病院を開設すると同時に、郊外タナバンにある旧聖母病院（KPM病院）を接收し、分院を開設、山田軍医に分院長をお願いした。

（この分院は現在ブルニプタンプラン病院として健在）

昭和十七年四月二十八日、日赤救護班九十八名がジャカルタ第百兵站病院に到着した。四月二十九日（天長節）には一同を集め、東方を遙拝し訓示をしたの思ひ出す。五月になり岡崎部長も元氣になられ、飛行機でバタビヤ第百兵站病院に追及して来られた。私はやっと院長代理を解放されたが、岡崎院長はしばらく静養

された。

六月になり、山田軍医と交代してKPM分院は既設の病院で環境が良く敷地も四万坪余、ここでは将校、司政官以上の内科患者、特に将官クラスの方を収容した。一方、離れの病棟に結核患者を預かっていた。日赤、陸軍看護婦も多く看護は行き届いていた。

この病院の裏庭には種々の果樹があり、ドリアンの大木も数本あり、大きな実をぶらさげており、トビトカゲ、リス、カメレオンなどもよく見かけた。この病院に勤務中、いろいろの方に接し思い出の多い病院であった。

昭和十七年八月二十日、やっと軍医大尉に進級の手続がないので日本一古い中尉と威張っていたが、ジャワでやっと申請した由。召集兵はなかなか進級しない。昭和十七年八月二十六日部隊の編成替えがあり、我々の第百兵站病院が主力となって南方第五陸軍病院（治第一〇八〇一部隊）となった。KPM分院はKPM分室と改名された。

岡崎部隊長は八月一日付け軍医中佐に進級し、マゲ

ラン南方第六陸軍病院長に転出され、南方第五陸軍病院長に場生松大佐が来られた。

母のこと

昭和十八年二月十日、内地郷里から航空便が届いていた。夜ゆっくり楽しんで読むことにしていた。夜業しいはずの便りにより母の死を知り、弔いも無事終わったと記してある。人生一度は経験せねばならない大きな悲しみを味わった。母を亡くしたショックは大きく、診察しながらも、不覚に涙ぐんだりして困った。何一つ孝養らしいこともしないできた私には残念至極であった。

母は私が台湾待機中に医博の学位をもらったこと、大尉に進級した時など喜んでくれた由、また母は弟の結婚で安心したとのことであるが、弟が終戦直前ビルマで戦死した悲しみを知らないで亡くなった。母は昭和十八年一月十二日夕、脳出血で急逝した。行年五十七歳の若死にであった。

現地兵補の身体検査

昭和十八年九月から十二月ころまで原住民の軍隊兵

補採用身体検査があり、また大団長の検査もした。日本の徴兵検査と同じように。私はジャワ島中部、東部に検査に出掛けた。

昭和十九年五月ころから防衛配備についたようである。この身体検査の最中に私は不覚にも発病し、一番近くのバンドンの分院に入院した。ここで大石婦長組に大変お世話になり、バンドンの金村高級副官も見にこられた。

その後、昭和十九年七月、長い間住み慣れたジャカルタKPM室からバンドン分院に転じ診療科長となる。(バンドン分員は戦後ハッサンサジキン病院として健在)

昭和二十年終戦前、敵の上陸に備えて患者収容隊が編成された。バンドン分院やブンチャック療養所関係の衛生部員で編成、その長を命ぜられた。終戦直前ブンチャックにも教育に行き鶏飼軍医の所で過ごし、八月十四日夕、バンドンに帰った。この日久しぶりに川山さんと赤崎出身の主計中尉、三人で夕食を共にし、その帰途、近所のドイツ人の家に立ち寄り帰ろうとし

たとき、「ドクター、日本は戦争に負けた」と話された。だが、まだまだ戦争は続くよと言って帰った。

#### 終戦

翌十五日早朝連絡あり、いかなる事態が起こっても驚くなど。さては昨夜の話は事実だったかと思ひ、敵方はポツダム宣言を聞いていたのである。

大急ぎで陛下の放送を聞くべく準備し、元氣な患者は院庭に集合させた。念のために軍通信部隊にも将校が行ったが、どちらも玉音放送は聞けなかった。敗戦により敵が来たわけでもないが、バンドンでも各所で自決する者が続出した。火薬庫が爆発し、軍隊内でもかなり動揺あり、私たちのバンドン分院でも看護婦の一人が入院患者と心中した。お甲いをしたが哀れであった。いつも寄っていたドイツ人は、『ドクターが悪いのではないから「腹きり」はするな』と本気で忠告してくれた。

#### バンドン分院二分し疎開

昭和二十年八月二十二日、バンドン分院は二分し、石原隊、福島隊として疎開することになった。石原隊

はかねてから診療所としていたチスルパンに行き、福島隊はタンジョンサリの茶畑にある自動車隊の部品倉庫数棟を改装して診療所、宿舎を作った。我々の任務は主としてバンドン付近の航空隊関係、航空修理廠などの疎開先患者の収容に当たった。

私たちの隊は軍医以下、下士官、兵四十八名、陸軍看護婦二十名、一般商社の臨時看護婦二十名の小ぢんまりの療養所であった。午前は診療、午後は開墾し野菜を作り、電気は自家発電、消灯は夜九時、英軍から食料制限があったとかで、御飯は一食茶碗一杯となる。それでは腹が満足せぬので、食前に豊富な砂糖、果実でミツメ作り、腹ごしらえをしてから御飯一杯を食べれば満腹となり、この茶畑には茶工場があり、野球場もあった。

十月十日前後には各地で原住民の暴動があり、石原隊の方では上野主計以下四名の犠牲者を出した。私たちの茶畑の丘の裾には原住民三千余人がとり巻いているとの情報あり、危険を感じたのですぐ軍用電話でバンドン司令部の金村高級副官に連絡し、警備をお願い

した。有り難いことに、翌日一個小隊余りが重・軽機関銃を沢山もって、私たち病院地区の要所、要所の防備をかためてくれた。

看護婦を無事移動さす

その後何事もなく経過し、看護婦、一般女子たちは、一足早く安全なバンドンに引き揚げることになった。トラックに乗り込んだ看護婦たちに、別れるとき一言「青酸カリはもう不要になったから捨てるよ」と言っ  
て、土の中に埋めて捨てた。以前バンドンから疎開するとき、橋本薬剤大尉からだれにも知られないようにと青酸カリをもらい、部隊用に、自殺用にと私のボストンバックに入れ、いつも私と行動を共にし、夜は私の枕となっていた。

その後、福島隊は男子衛生部員とバンドン一般邦人病院を合わせてバンドン分院開設の命をうけた。このバンドン分院はバンドン地区作業隊の傷病者を収容し、最後まで残留するものと覚悟していた。各部隊は次々移動しており石原隊も移動中であったが、一部途中でストップを命ぜられ、我々は石原隊とふたたび合流し

た。次にチマヒに移動して病院を開設。ここでは海軍も隣に病院を開設した。

我々はチマヒからまたバンドンに移動させられ、石原大尉を長として病院を開設した。後で判明したことであるが、チマヒにいたころには、石原、福島は共に既に軍医少佐になっていた。軍医部の部員が少佐になっているから階級章をやると言ってくれたが、ついに使用しなかった。

私たちの宿舎にミナミさんという男爵がいて、毎日英軍司令官の宿舎に使役兵をつれて御用聞きに出掛けている。司令官キーン少将の私生活を話してくれた。しかし、その後にはバンドン分院はまた編成替えることを命ぜられた。

石原君は急に「お前先に帰れ、外科の僕が残るから」と。四月十九日急にバンドン空港からジャカルタに、英軍輸送機で衛生兵、看護婦、患者を送ってもらった。空の旅は三十分余りであるが、英兵は貧しいから、気流も良いし、エンジンの調子もよいのに、機を上にと動揺させ、慣れない衛生兵を嘔吐させて、時計

など取り上げた。

バンドンから空輸された私たちはジャカルタ郊外のカンボンマカッサルの南方第五陸軍病院本院に勤務することになった。病院と言っても日本軍が捕虜收容所にしてた建物、竹の柱に萱の屋根である。椰子畑にあったので、リスが囓って実を落とすので危険であった。ここでは、はじめ京大耳鼻科教授の後藤先生と一緒に寝て、先生が帰られた後は九州帝大の森優教授としばらく一緒に過ごした。

病院内の一郭には内地に帰る一般軍属、朝鮮、台湾の人たちがおり、うちの病院の食事の世話をしていた。ここでは朝鮮人は戦勝国だと威張っており、台湾の人たちはご迷惑をかけて済みませんと言って礼儀止しかった。病院船が入港する度に、患者、軍属、一般人の方たちが続々内地に帰って行った。

ガロー事件（昭和二十年十月）

終戦後二カ月経ったころ、インドネシアは独立運動が盛り上がり、各地で暴動が頻発した。

私たちは南方第五陸軍病院バンドン分院に勤務して

いたが、終戦後は二分し、半分（石原隊）は南五病院チスルパン療養所に疎開し、他の半分（福島隊）は陸上勤務中隊（武知氏や西本慎一先生方）の疎開先チケルの隣タンジョンサリの茶畑に疎開した。そして自動車隊の部品倉庫数棟を療養所に改装した。私たちは航空隊、航空修理廠、などの疎開部隊患者の収容に当たった。

十月十日前後は一番危険な時期で、私たち南五病院もガロー事件として犠牲者をだした。このとき陸上勤務中隊のガロー派遣隊三十六名全員が悲惨な犠牲になられた。ガロー派遣を命ぜられた武知氏の部隊はこの事件を知らないでガローに行き、街外れの南五病院ガロー分院に行かれたとき、播磨分院長いわく、「よく来てくれた。君たちの派遣隊は全滅した。今うちの軍医と衛生兵が遺体を収容している、すぐ応援してくれ」と。突然の悲報をはじめて聞かされて茫然とした、と記しておられる。

ガロー派遣隊の遺体収容に当たっていたのは佐谷中尉以下数名であった。実はチスルパンの石原隊からガ

ロー分院に連絡に行った上野主計中尉以下四名が帰らないので、捜索に行ったが見つからず、代わりに勤務中隊ガロー派遣隊の遺体を見つけ、その収容に当たっている真つ最中であった。上野中尉の遺体発見はその数日後であった。

そのころ、私たちのタンジョンサリの茶畑の療養所には毎晩のように泥棒が入っていたが、私たちの丘の下には約三千人が取り囲んでいるとの情報が入り、私はすぐ軍用電話で、バンドン司令部の高級副官金村中佐に救援を求めた。

その翌日、小隊長が指揮し、重・軽機関銃をもって我々療養所の周囲をかため、警備してもらった。お陰で、事なきを得た。陸軍看護婦、一般商社の臨時看護婦をかかえている我々の療養所は一名の犠牲もなく、バンドンへ移動した。

私にも次のような体験があるが、軍隊は特に戦地における軍隊は運隊であるので、運の強い者と運の弱かった、悪かった者とが生死を分けているのである。そこで、戦地での生死は紙一重で、運不運は自分の力では

どうすることもできない。

### 運のつよい戦友

私たちの第百兵站病院（後で南方第五陸軍病院と改名）の戦友軍医たちは毎年秋には集まり、元気な顔を見て旧交を集めている。平成三年十月にも岡山で集まった。

Ｔ君は大阪で開業している仲間の軍医であるが、いつも元気で毎会出席している。私は彼に会う度に君は運のいい男だなあと言い、彼もそう思っている。

大東亜戦争出征以来一緒に過ごしたが、フィリピン、ルソン島上陸の際、隣の輸送船「巴洋丸」が目の前で敵魚雷にやられ沈没した。この船には四十八師団の第四野戦病院が乗っていた。人員は助けられたが衛生材料は沈んでなくなった。このことは前に記述したとおりであるが、我々は数班に分かれ野戦病院の代わりに、各地で忙しく働いた。

間もなく急に、ジャワ作戦参加の命令が出た。大急ぎでリンガエン湾、ダモルテスで、「あらびあ丸」（一万トン）に乗船、大きな船団（四八隻二万トン）大

輸送船団で日本海軍の護衛で南下した。ジャワ島上陸の前夜、私たちの船にいた精神病者が海に飛び込んだ。「あらびあ丸」はすぐ船列を離れ一回転した。代わりに後続の「徳島丸」に直撃爆弾を落とし、「徳島丸」は沈んだ。我々は精神病者のお陰で命拾いした。船団の他の船は皆我々が沈められたと思っていた。その精神病者は後で日本海軍に救助されたと知らされた。

このＴ軍医は支那事変の応召が長かったので早く帰るよう命令が出た。うちの部隊から心臓の強い三人の元気な軍医が内地へ帰ることとなった。シンガポールで内地に帰る豪華病院船「阿波丸」をみつけ強引に便乗を頼んだが断られた。残念がっていたが、この「阿波丸」は出港間もなく敵魚雷に沈められた。病院船でありながら、軍需品、将校などを乗せていたことが敵には知られていた。「阿波丸」にはジャワ島からの献納ダイヤがバケツ一杯にあった由、Ｔ君は「阿波丸」乗船を断られ命拾いした。別便で無事内地に帰ったが、再び召集され、他の軍医五名と一緒に広島で勤務することになった。しばらくしてＴ君だけが朝鮮の部隊に

転属させられた。彼は部隊本部は窮屈で嫌いだと、出先の部隊に勤務となった。

終戦と同時に本部はソ連に抑留されたが、出先の部隊はほとんど南下し、無事日本に逃れ帰った。広島で別れた他の軍医は皆原爆の犠牲となった。丁君はほんとは幸運な男である。

額田君（昭和十九年）「あらびあ丸」

我々の会誌「昭和会五〇年誌」にこう書いている。題名は「暮のお陰で命びろい」と。

昭和十九年、三回目の召集では第四十九師団第四野戦病院長であった。輸送船の名は「チャイナ丸」（五〇〇〇トン）五千人の兵員がスシ詰めであった。やつとマニラについた朝、敵機の空襲で、マニラ停泊中の約五十隻が全部沈められた。次の船を待つ間約一カ月間、「チャイナ丸」輸送指揮官水野中佐と度々暮を打った。次の船団が来たので、額田部隊は「あらびあ丸」、水野部隊に「マニラ丸」と決まった。

暮を打ちながら、「おい額田君、こんどはお前の船の方がええぞ、代わってくれ」と。額田君は「ようご

ざんす」二つ返事で船を交換することになった。部下たちはいい船に乗れると喜んでいたのに、不平を言ったが、そのとおりになった。マニラ港を出た翌日、「あらびあ丸」は敵の魚雷にやられ沈んだ。水野中佐も勿論亡くなられた。そして「マニラ丸」は無事シンガポールに辿り着いた。門司を出てから三カ月かかった由。

この「あらびあ丸」はフィリピンからジャワ作戦に参加したとき、私たち第百兵站病院が乗船した豪華客船であった。ジャワ上陸の前夜、精神病患者が船に飛び込んだ。「あらびあ丸」は一回転し船列から離れ、後続の「徳島丸」が前進、私たちの船の位置に出た。そのとき、敵は直撃爆弾をおとし、「徳島丸」は沈んだ。我々はこの精神病患者のおかげで命びろいしたことは前述した。「あらびあ丸」の因縁を思い出す。

次に蘭領ガラン島について少し記述してみる。我々の南五病院は大世帯であり、何か所にも分かれていたので敗戦後内地帰還するにも早いグループ、遅い組、いろいろのコースがあった。その一例としてガラン島

行きがあった。

高橋軍医を長とする約七十名がガラン島行きを命ぜられた。昭和二十一年一月二十日、ジャカルタのタンジョンブリオク港を出航、二十六日ガラン島に上陸した。ガラン島はシンガポール近くの無人島で周囲約五、六キロのマングローブの密生した熱帯の孤島である。

第一次世界大戦の時にはドイツ人捕虜が収容されていた。高橋隊は港から少し離れた地域を治村（ジャワは治兵団）と命名、治病院を開設した。そして食料確保のため開墾しサツマ芋をつくった。海藻、魚介類をとり、動物は何でも捕らえて食糧にした。トカゲ、蛇、野豚も次第にいなくなり、猿も初めは沢山いたが食べた。だが美味ではなかったと戦友は話してくれた。鶴飼軍医は作業上のミスで二日間食塩の配給をとめられ、戦闘帽にしみこんだ汗をなめたという。

ガラン島にもいろいろ部隊が上陸して、数十カ所の部落ができて賑やかになった由である。また、高橋隊長の話では、英軍の捕虜監督カーター少佐がやって来て、自分の当番の自慢をした。その名前は藤山一郎だ

と言う。それは日本の有名な歌手だという。やがて少佐に連れられて藤山一郎さんが来て歌ってくれたという。

南五病院のガラン島出航は、昭和二十一年六月二十八日、無事大竹へ復員である。

最後に内地帰還について

ある日夕方、病院事務室で、軍医大佐池井院長、中野衛生少佐、庶務課長と三人で雑談していたとき、病院船の入港が伝えられた。まだ、なかなか帰れぬと思っていたので、冗談半分に、「順番がきたら帰りますよ」と言ったら、以外にも池井院長は「福島君まで帰ってもらおうか」と言われた。思いがけぬことで大変驚いた。

昭和二十一年六月八日、南五命令が出た。

姫路で編成当時の古医部隊員百余人と、患者、看護婦約八百人を引率して帰国することになった。そして内地は薬品不足とのことで、衛生材料、薬品など三十梱包して持ち帰ることになった。リバティ船六千トンが入港した。これに鉄道隊と病院関係三千余人乗るこ

とになった。

タンヂョンブリオク港から大竹まで約十日間の船旅であったが、船内では二人に畳一枚の広さで、リュックサックをおけば座るだけの広さである。私は船尾の甲板で衛生材料の間に藁藁を敷き、三上先生と一緒に寝た。

話しながら、月を見ながら船は北上、台湾付近までは涼しく爽快であったがだんだんと寒くなった。

ジャカルタを出港して数日後、婦人患者一名死去し、水葬が行われた。弔笛を鳴らしながら船は一回転し北上した。また、他船内で出産があり、うちの部隊の看護婦が無事赤ん坊をとりあげた。

船は種子島と屋久島の間を通過し、島かげを眺めて感無量。ついに六月二十一日広島県大竹に上陸した。残務整理に三日を要し、二十三日解散、復員した。

大竹に着いて留守宅に電報をとったが、二三日で帰れるならば帰る方が早いですよと言われ、電報は中止した。鳥取県へ帰る部隊員と一緒に岡山まで来たが、伯備線の列車はもうなかった。その夜は駅のプラッ

トホームに野宿し、私は独りで夜の街、母校岡山医大病院の方を見れば一面焼け野原、瓦礫の山で昔の姿はなかった。

翌朝、一番列車に乗り込み、戦闘帽、軍服、軍靴、手作りのリュックサック姿で、次々と郷里近くの駅に着くとお互いに「サヨウナラ」して降りて行った。

長い間音信もなく、突然の帰宅に家族の方はビックリしたことであろう。川上君は浦安で降り、最後に私は由良駅に降りた。リュックサックを背負って我が家に帰った。

迎えてくれたのは初対面の弟の嫁、優美枝さんであった。すぐ育英中学校にいた父や倉吉にいた妻子に電話連絡してもらった。余りに突然の復員に皆が驚喜喜んだと思うが、弟の戦死はまだ不明であった。

### 【解説】

○第七方面軍 病院・衛生関係部隊表

方面軍直轄

南方第一陸軍病院

威

六〇九一部隊

南方第三陸軍病院

威 一〇三〇六部隊

第四十六師団野戰病院

静 一一九六九部隊

患者輸送第六十一小隊

岡 七〇〇七部隊

第二十九軍 マライ

定 九四一一部隊

第一三〇兵站病院

定 四〇二六部隊

第一三一兵站病院

定 四〇二七部隊

第一三五兵站病院

定 七一九四部隊

患者輸送第九十八小隊

岡 一八五三〇部隊

第九十四師団衛生隊

威烈 一八五一〇部隊

第九十四師団第一野戰病院

威烈 一八五一一部隊

第九十四師団第四野戰病院

威烈 一八五二二部隊

第二十五軍 スマトラ

富 八九九一部隊

南方第八陸軍病院

富 一〇三〇九部隊

南方第九陸軍病院

富 一〇三一〇部隊

南方第一〇陸軍病院

富 一〇三一一部隊

南方第一七陸軍病院

富 一〇四九九部隊

近衛第二師団第一野戰病院

富 一〇四九四部隊

近衛第二師団第四野戰病院

富 三八一七部隊

近衛第二師団衛生隊

富 三八一三部隊

第十六軍 ジャワ

治 一六〇二部隊

南方第五陸軍病院

治 一〇八〇一部隊

南方第六陸軍病院

治 一〇八〇二部隊

南方第七陸軍病院

治 一〇八〇三部隊

第四十八師団衛生隊

海 八五九一部隊

第四十八師団第一野戰病院

海 八五九二部隊

第四十八師団第四野戰病院

海 八五九三部隊

第一〇九兵站病院

海 七〇一五部隊

患者輸送第三十九小隊

海 四八〇二部隊

患者輸送第六十五小隊

海 六七五七部隊

第七方面軍編成表(主要部隊)

岡 一六一五部隊

第七方面軍直轄部隊

静 一一九六一部隊

第四十六師団(一部欠)

岡 一八五〇〇部隊

昭南防衛司令部

嶽 一〇九一六部隊

獨立混成第二十六旅団

治 一六〇二部隊

第十六軍司令部

治 一六〇二部隊

第四十八師団 スンダ、チモール

海 八九四〇部隊

獨立混成第二十七旅団

雄 一〇八一〇部隊

独立混成第二十八旅団 敬 一〇八二〇部隊

第二十五軍司令部 スマトラ 富 八九九一部隊

近衛第二師団司令部 宮 三八〇〇部隊

独立混成第二十五旅団 盤 一〇九〇八部隊

パレンバン防衛隊 富 一〇三六六部隊

パンカランプランダン防衛隊 富 二一三六部隊

第二十九軍司令部 定 九四一一部隊

第九十四師団 威烈 一八五〇一部隊

独立混成第三十五旅団 教 一五八三二部隊

独立混成第三十六旅団 鍊 一五八四〇部隊

独立混成第三十七旅団 鍛 一五八四四部隊

独立混成第七十旅団 果敢 二四〇〇一部隊

その他の南方軍関係衛生・病院関係

南方軍直轄

第三十七軍関係

第一四七兵站病院 灘 一〇一一部隊

第十八方面軍関係

第一四八兵站病院 義 一七二〇四部隊

ビルマ方面軍関係

第一三三兵站病院 森 四〇四六部隊

第一〇六兵站病院 森 七〇〇七部隊

第一〇七兵站病院 森 七〇〇六部隊

第十五軍関係

第一〇五兵站病院 林 七一三一部隊

第一二四兵站病院 林 五二二四部隊

患者輸送第五十八小隊 林 六九四七部隊

第二十八軍関係

第一一八兵站病院 策 六七七〇部隊

患者輸送第七十小隊 策 五二七〇部隊

患者輸送第七十一小隊 策 六〇三一部隊

第三十三軍関係

第二二一兵站病院 昆 二二六五部隊

患者輸送第六十小隊 昆 七二三七部隊

南方軍関係直轄

南方第十二陸軍病院 威 一〇六一二部隊

南方第十三陸軍病院 威 一〇六一三部隊

南方第十四陸軍病院 威 一〇六一四部隊

第六十三兵站病院 威 七八六二部隊

第七十四兵站病院	威	四八〇一部隊
第七十八兵站病院	威	四六〇七部隊
第八十六兵站病院	威	三七六二部隊
第一二九兵站病院	威	三八八九部隊
第一三四兵站病院	威	四〇四七部隊
第一三七兵站病院	威	七一九六部隊
第一三八兵站病院	威	九七六六部隊
第一三九兵站病院	威	九七六七部隊
第一四一兵站病院	威	九七六九部隊

要塞以外の陸軍病院 一七二（ ）

○終戦時（昭和二十年八月）の医務関係部隊数

兵站衛生隊本部	三	兵站病院	一〇三
患者輸送隊本部	五	患者輸送隊本部	二
患者輸送小隊	四六	患者輸送班	六
陸軍病院	二二九		

○開戦時（昭和十七年五月）の医務関係部隊数

（ ）内は南方

兵站衛生隊本部	八（三）
兵站病院	三六（一三）
患者輸送隊本部	七（三）
患者輸送隊本部	二（ ）
患者輸送小隊	二八（一二）
患者輸送班	六（二）
野戦予備病院	五（ ）